

『筋ジストロフィーはここまでわかった；

厚生省研究班 20 年の歩み』

筋ジストロフィー症研究連絡協議会 編

荒木 淑郎／熊本大学第 1 内科 医師

我が国初の大型な学際的プロジェクト

1968 年に発足した厚生省特別研究費補助金によるミオパチー研究班(班長：沖中重雄先生)は、我が国での初めての大型な学際的なプロジェクトであり、その班研究方式は、1973 年に発足した特定疾患(難病)調査研究班の先駆的なモデルとなったことは周知のとおりである。

また現在の筋ジストロフィー対策は、1963 年 3 月に「親の会」(現在の日本筋ジストロフィー協会)が、時の厚生大臣および医務局長に陳情し、直ちに「進行性筋萎縮症対策要綱」が策定されたことにより始まったものである。これを受けて国は、筋ジストロフィー患者の入院中の療育費用を負担し、地区の国立療養所は大学機関と連携して患者を収容し、学齢期の患者に教育の機会を与え、積極的にリハビリテーションを行ない、世界でも類をみない包括的な医療が展開されたのである。

この試みは、厚生省、大学研究

機関、国立療養所、日本筋ジストロフィー協会のいずれにとっても初体験であったが、きわめて緊密な連携によって円滑に運営され、我が国の筋ジストロフィーの成因の解明と治療に大きな役割を果たし、その後、我が国の研究は世界的な舞台で脚光を浴びることとなったのである。

世界の筋ジストロフィー研究を紹介

本書は、ただ単に厚生省研究班 20 年の歴史にとどまらず、日本を含めた世界の筋ジストロフィーの研究の歴史と現状が簡潔に解説されており、きわめてユニークな内容のものとなっている。

第一部では、我が国の研究の歴史と病態の研究をはじめ行政的対応が述べられ、第二部では、筋ジストロフィーの研究の現状について、筋の成長、病因、遺伝相談、疾学、画像診断、データベース、長期予後、体外式陰圧人工呼吸器およびモデル動物についてわかりやすく解説されている。

筋ジストロフィーの研究に熱心

な国ほど、文化の程度が高いと江橋節郎先生は述べられていることは傾聴に値することばである。筋ジストロフィーに焦点を合わせて、我が国の研究者が真剣に取り組んできたこの 20 年間の成果は、正に官民一体となった熱意によるものと言えよう。

Duchenne 型と Becker 型の筋ジストロフィーにおけるジストロフィンという蛋白質の欠損の発見は、まさにこれからの研究の出発点である。これを契機として筋ジストロフィーの成因の解明と治療法の開発への道が拓かれるように思われる。

本書は読んで興味尽きず、示唆に富む内容が多く、医師をはじめ関連の方々には必読の書として推薦したい。また筋ジストロフィーの研究に全力を傾注された各界の先達の情熱に心から敬意を表するとともに、今回の出版に対し努力された小沢鉄二郎先生をはじめ関係の方々に御礼申し上げたい。

(A 5 判, 244 ページ, 図 36, 写真 38, 定価 2987 円(税込), 送料 300 円, 1990 年, 医学書院刊)